



年越しの
神

川崎ゆきお

除夜の鐘が鳴る年越しの深夜、新年の初詣を済ませた吉田は、妙な老人から話しかけられた。

「年が越えましたなあ」

「はい、無事に年を越せました」

「いや、そうじゃない」

「はあ」

「人が越すものじゃない」

「え」

「あなたが越そうが、犬が越そうがどうでもよろしい」

「じゃあ、何が越すのですか」

「年じゃないか」

「時間のことですか」

「だから、年の神が越える」

「干支ですね。今年は羊年なので」

「あれは、神じゃない。羊は神かね」

「羊を飼って生計を立てている民族なら、神に近いかもしれませんし」

「そういう動物ではない」

「じゃ、年越しの神とは何でしょう。神社に行っても干支は飾られています、それ以外のものですか」

「門松で迎える神とはまた違う」

「何ですか」

「一般には知られていない」

「しかし、もう二千年以上です。どんなローテーションで」

「干支は十二年交代制だろ」

「そうです。年神は」

「一人」

「聞いたことありません。年越の神なんて」

「神さんなどいくらでもいる。一人ぐらい知らなくても不思議じゃない。むしろ知られていない神の方が多いのじゃ」

「年神はどこに祭られているのですか」

「今は干支」

「じゃ、今年なら羊じゃないですか。やはり。年神は羊でしょ。年男のように」

「あんた、羊を拝むかね」

「拝みません」

「猿は」

「僕は拝みませんが、猿や犬は信仰としてあるでしょ。蛇も」

「年神はそのタイプじゃない」

「でも信仰している人もいますでしょ」

「神が万ほどあるように、信仰も万ほどある」

「あ、はい」

「だから」

「はい、何ですか」

「年を越すのは年神。人が越すのではない。静かに年の神が越していくのを見ておればいい。見えんがな」

「時間の神様ですね」

「日が暮れる。日が昇る。それと同じじゃ」

「そうでしたか」

「流れ星に願いをかけるように、年神が越えるとき、願いをかける」

「はい」

「自分のことじゃないぞ。自分の年越しではない。くどいがな」

「それはどこに書かれているのでしょうか」

「これに気付いた人は太古からおる。だから、調べれば出てこよう」

「まさか」

「年越し、年越しと、うるさいので、つつい出て来てしまったわい」

「じゃ、あなたが年の神、年神様でしたか」

「月日のたつのは早い」

「あのう」

「なんじゃ」

「いつもはどこにおられるのですか」

「今年は羊の上に乗っておる」

「そうなんですか」

「蛇の上は乗りにくい」

「はい」

「今年はクッションが良いし、冬場はこれに限る」

「羊毛ですからねえ」

「しかし、夏場暑苦しい。夏は蛇がいい」

「あ、はい」

妙な老人は初詣客の人混みの中に消えていった。

了